日本の童和

花咲かじいさん

昔むかしあるところに、正直者のおじいさんとおばあさんがくらしていました。ある日のこと、二人の家にどこからか、かわいらしい子犬が迷いこんできました。子どもがいなかった二人は、「この子をわしらの子どもと思って、大事に育てよう。」と言い、大変かわいがりました。子犬はすくすく大きくなりました。

ある日、おじいさんが田んぼへ出かけようとすると、犬はおじいさんを呼ぶようにほえながら、裏の畑へ走っていきました。おじいさんが後を追うと、犬は畑の土をかいて、『ここ掘れ、ワンワン。』と教えました。おじいさんがくわで畑を掘ってみると、これは不思議。大判小判がざくざく出てきたのです。おじいさんはびっくり仰天！大判小判を家に持って帰ると、おばあさんもびっくりして腰をぬかしてしまいました。

その騒ぎを聞いて、隣の意地悪じいさんとばあさんがやってきました。二人は羨ましくてたまりません。話を聞いて、「その犬を貸せ！」と、嫌がる犬に縄をつけ無理やり畑へ引っぱっていきました。犬が苦しみもがいていると、「しめしめ、ここを掘ればよいのだな。」意地悪じいさんは早速掘り始めましたが、掘っても掘っても出てくるのは茶碗のかけらやがらくたばかり。怒った意地悪じいさんは犬を殺してしまいました。おじいさんとおばあさんはそれを知ると大変悲しみにくれ、庭の隅に墓を作り、手を合せました。

いく日か経つと、そのお墓から木の芽がちょんと生え、みるみるうちに見事な大木に育ちました。おじいさんとおばあさんは、その木で臼をこしらえました。試しに米をついてみると、不思議なことに米がどんどん増え、臼からあふれ出しました。二人が驚き喜んでいると、意地悪じいさんとばあさんがやってきて、「その臼を貸せ！」と持って行ってしまいました。しかし米をついてみても、米は増えるどころか粉々に砕けてしまい、怒った意地悪じいさんは臼を割って焼いてしまいました。

正直者のおじいさんが臼を返してもらいに行くと、臼はすっかり灰になっていました。悲しみながらもその灰を持ち帰る途中、ふいに風が吹き、灰が枯れ木にかかったかと思うと、不思議なことにぱっと花が咲きました。「これは面白い。」おじいさんは村の枯れ木に灰をかけ、次々と花を咲かせていきました。するとそこに殿様の行列が通りかかって、「これは見事じゃ、あっぱれ。」と大喜びし、おじいさんにどっさり褒美をとらせました。

それを聞きつけた意地悪じいさんは、「その灰を貸せ！」と灰を持って行ってしまいました。意地悪じいさんは褒美をたくさんもらおうと、殿様の行列に思い切り灰をぶちまけました。殿様や家来は頭から灰をかぶってしまい、怒ったのなんの。「この無礼者！」意地悪じいさんは家来にさんざんに叩かれ、なきなき帰っていきましたとさ。

＊物語には諸説あるため、こちらで紹介している内容は絶対的なものではありません。